

保育者の顔画像提示が4・5歳児の向社会的行動に与える影響

神田 千穂

【目的】向社会的行動とは、コストの有無や動機にかかわらず、他者に利益をもたらす自発的な行動である。向社会的行動は、他者から見られている場合に促進され、この傾向は未就学児からみられる。また、成人においては、実際にその場に他者がいなくても、監視を示唆する目のイラストを提示した場合や、神などの規範的・道徳的存在を意識させた場合に、向社会的行動が促進されることが示されている。一方で、Fujii et al. (2015) や奥村ら (2016) は、目のイラストの提示による間接監視が未就学児の向社会的行動に影響を与えないことを示した。目のイラストは未就学児にとって生態学的妥当性が低いため、向社会的行動を促進する効果がなかったのかもしれない。そこで本研究では、児に道徳や規範を意識させる存在である保育者の顔画像を提示することで、間接監視が4・5歳児の向社会的行動に影響を与えるかを検討した。さらに、児は保育者とそれぞれ個別の関係性を築くため、保育者とどのような関係性を持つ児が、より保育者の顔画像を意識し向社会的行動を行うのかを検討した。

【方法】A 認定こども園の4・5歳児クラスに所属する22名(男児15名、女児7名)を対象とした。保育者条件(机上に対象児のクラス担当の保育士の顔写真を提示)、見知らぬ大人条件(対象児と面識のない大人の顔写真を提示)、提示なし条件の3条件を設定し、各条件下で児の向社会的行動を調べるため、10個のアメを他児に分配する分配課題、実験者が机から落としたクリップを拾う援助課題、紙芝居を用いた向社会的判断課題(援助場面ストーリーと貸与・分与場面ストーリー)を実施した。また、スキャンサンプリングを用いて、自由遊び場面における児と保育者の近接の有無と、指示出し場面における児と保育者の距離を記録し、各課題との関連を調べた。

【結果と考察】分配課題において、他児に分配したアメの個数に条件間で有意差がみられなかった。援助課題においても、児がクリップを拾ったタイミングに基づいて算出した援助得点に条件間で有意差がみられなかった。しかし、向社会的判断課題において、児が貸与・分与場面ストーリーのような状況下で他児を助けるか、自分の都合を優先するかを尋ねたところ、保育者条件では、向社会的回答をした児が非向社会的回答をした児よりも有意に多かった。これより、顔画像による間接監視は、4・5歳児の分配行動や援助行動といった向社会的行動には影響を与えないが、保育者の顔画像提示は一部の向社会的判断を促進する効果があることが示唆された。4・5歳児は、対面相手からの賞賛や批判といった直接の反応を向社会的行動の動機づけとしているが、保育者の顔画像を見ると、道徳的・規範的な判断をする傾向が高まると考えられる。

さらに、分配課題において、自由遊び場面における保育者との近接率が高い児の方が、近接率が低い児よりも、保育者条件での分配数が多く、分配理由の向社会性得点が高いことが示された。反対に、向社会的判断課題の貸与・分与場面ストーリーにおいて、自由遊び場面での保育者との近接率が低い児や、指示出し場面で保育者との距離が遠い児の方が、自由遊び場面での保育者との近接率が高い児や、指示出し場面で保育者との距離が近い児よりも、向社会的回答をした児が多い傾向があった。これより、保育者との近接が多い児ほど、保育者の顔画像提示によって向社会的行動が促進されるが、よりコストの高い向社会的行動においては、保育者への近接が少なく、指示出し場面で保育者から離れた位置に座った児ほど、保育者の顔画像提示によって向社会的行動が促進されることが示唆された。(比較発達心理学)